

佐々木薫詩集

ディープ・サマー

1. コザという街があった 1964・沖縄

2. プライベート・レッスン



蟻地獄に嵌まった蝶が大きく翅をあえいでいる。

見る間に翅は二つに裂かれ、碧色の燐光を放ちながらすりばち状の穴の、その渦の奥底へ……。

二枚の翅は、いま飛び立とうとしているかのように最後の力をふりしぼって……ふいに……傾く。

抗えない力に引きずり込まれ、

わけもわからぬまま素直に息絶える木の葉蝶。

過酷な歴史の狭間で絶命していった者らの最後の叫びのように、蝶の翅はいともた易くひき裂かれる。

頭部からまっぶたつに。

「タアーテエ、ウエエータルモノーヨオ」

窓の傍を通りすぎる高らかな歌声。

「イザ タアータカワーンー フルイータテエ イザア」

とつさに振り上げられる私のコブシ。

なつかしい雄叫びに急ぎ立てられ、ハダシで部屋を飛び出した。

いつせいに打ち振られる日の丸の小旗！

えっ 日の丸？ 日の丸？ 日の丸！

このオキナワで日の丸の行進に出会うなんて！

思いがけない光景に出会って、つんのめりの宙返り。

驚きのあまり突び出した二つの目玉は、「悲願・祖国復帰行進」の横断幕めざして矢のように飛んで行った。でも、あつという間に波打つプラカードに打ち返され、炎天下の路上にころがり落ちてしまった。

どうして？ どうして？ どうして！

祖国？ ソコクって？

驚き、うろたえる私を尻目に、滝のような汗を降り撒きながら行進する彼ら。その隊列はカデナ第二ゲートを包囲し、ゴヤ大通りからコザ十字路までうねり、渦巻き、立ち止まり、走り廻る。

「オキナワヲ カエセエー」

「オキナワニ カエセエー」

シユプレヒコールはMPカーのクランクシヨンの追われ、脅され、燃える夕日に背を焼かれながら、黙々と進む。

長い長い行列の最後尾が赤い砂塵の向こうに消える夕暮れ。

私は手からすべり落ちた鉛筆を拾い、ノートに書き込む。

一九六四年、オキナワに來たばかりの私が目にした「悲願・祖国

復歸行進」の長蛇の列。この出会いが私のなにかを変えた。

青春の私の手から抜け落ちてしまったものが、ここで「祖国」と呼ばれ、人々の熱い視線を浴びていた。

あの日、胸に落ちてきた一つの疑問符を十字架のようにぶら下げ、私が沖繩で歩いている道は、どこか出口のないラビリンスに似ている。^{*1}

私が迷い込んだ巨大ラビリンス。

右も左もわからない十字路に立ち、おろおろきよろきよろ落ちた

目玉を捜している。いきなりの直撃を受けて、レンズは破裂した。あまりの熱風に煽られて、レンズは溶けてしまった。

盲目となった私は「祖国」の匂いを嗅ぎまわる野良犬となって、行進の最後尾について、うろろうのろのろ歩く。

—あの夜 行進があつた

あの夜 岬へ向かい

浮き出た灯り……夥しい鬼火 狐火 不知火 遺念火^{イシビ}

いぶかるわたしの横を不思議な明るさで

もつれ重なり つながりあい

辺戸岬から尾をひき

消滅した光のイリュージョン^{*2}

あたふたと部屋に戻った私に夫がわめく。姑がわめく。

「ひもじい、ひもじい。ソコはまだか、準備はまだか！」

さあ、まな板を取り出して、ソコを乱切りのコマ切れにぶつた

切れ。27度線の国境はザクザクのザツクリ！ 木っ端ミジンに粉砕しよう。それでも飲み込めない固まりは喉に手を突っ込んで吐き出しな。

異物は食えない。食えないものをむりやり口に押し込まれ、皇国の父祖らはこぞつて憤死した。銃後の母は東京大空襲の焰に焼かれ、学徒動員された兄たちは海の藻屑となり果てた。

「ブン 祖国ダナンテ」

「トンデモナイ」

ある日、その土地、その番地で産声を上げたたとたん、
未来に付随する一切、戸籍にまつわる記録や運勢まで
一枚の令状、投げ込まれたハガキで決まってしまうとは……

このアタシは飢死した子どものヌケガラである。

さびしい魂を陽にサラシテゐる餓鬼のナレノハテ！

焦土と化した荒野をうろつき歩き、

チョコレートのかけらを拾つて食べたアタシたち。

ガムをばらまくアメリカ兵のトラックを追いかけて

東京へ家出したスキツ腹、ムカツ腹の子どもたち。

こうして亡国の徒となつた若者は大学図書館前の広場に集まりスコットランドのダンスに興じ、声を張り上げ肩組みあつてロシア民謡をうたうのだ。

「黒い瞳の若者がアアアア

わア―たア―しいのこォ―こォろをとりこにし―た」

黒い瞳の若者はどこにいる。

デモ隊の尻につかまって、私はうつとり歌をうたう。

歌声喫茶に出かけては黒い瞳をつかまえて、深夜こつそり、その眼を覗き込む。ぽつかりとひらいたままの瞳孔は暗い。底のない溜れ井戸を覗いているような不気味さ。

ひきつった私の貌はたちまち時代の闇にのみ込まれ
ふいに実体を無くす。

脱出

Escape

私は落胆し、恐れおののく。

歌の言葉に懸想してはならない。

私は亡命のパスポートを携えて

リュウキュウ・アイランド行きのトラップを駆け登る。

青く輝く七つの島をとび跳ね渡り

五月のナハ国際空港に降り立った日。

空に一点の曇りもなかった日。

(ピーカンカンの滑空だあ)

羽田からたった二時間半の脱出劇を爽やかに終えて

クライスラーのオープンカーに乗り込んだ。

ぶっ飛ばせ、ぶっ飛ばせ！

戦車もミサイルも、そののけ！ そののけ！

「天下晴れての脱走ドラマの幕開けだあ」

追い越した軍用トラックはベトナム負傷兵で満杯だ。

兵隊たちはみな首をたれ、ジャングルの白昼夢にうなされている。

あたりに漂う阿片の甘く淫靡な匂い。

「フンフン、これが噂に聞くアメリカ兵の体臭なのか」

私は鼻をヒクヒクさせながら、キャンプ・フォスターの丘になびく

星条旗の下を猛スピードでぐり抜ける。

基地のフェンスに群がり咲くピンクの夾竹桃をへし折って

汗のしたたる黒髪に飾る。

A&Wのドライブインでチキンの太腿にかぶりつき

薬くさいルートビアで胃袋をじゃぶじゃぶ洗淨する。

がじゅまるの木に群がる熊蟬^{サンサナー}の大量。

シャツシャツ シャツシャツ シャツシャツ シャー

サンサナーの身も世もあらぬ阿鼻叫喚、

この世を切磋してやまない絶唱付きの狂騒曲だ。

頭上からシャツシャツ シャツシャツの熱いシャワーが降り注ぎ、

私の夏はサンサナーの喚きに満たされる。

フィナーレ

苛立たしい夏、いつまでも終わらない夏。

そうだ、わたしは夏の記憶のうちにしか棲むことができない。

わたしの夏は泡立ち、渦巻き、侵食され

くりかえし押し寄せる波に穿たれる。

屋となく夜となく（夢のさなかでさえ）波打ち際は容赦なく

削りとられ、きわどい落下のラインを示す。

〈それは、わたしに与えられた一本の矢印！〉

拒むために

慄くために

叫ぶために

そこにある切り岸。

幻覚の吊り橋を手探りよせ、一歩踏み出し

そして……あつけなく転落する。

アイツ 見てごらん 火事やさ 火事！

胡屋も諸見大通りも火の海だよ。

「ハッサ デージなとん 火ゴーゴー燃えてるサア」

そうよ この街はガスのニオイが充満してたサ、

催涙ガスに笑気ガス、くしゃみガスに窒息ガス

道にひっくりかえって泡プウプウ

わったーむる狂^{フリムン}り者なたサ。

「アイツ、デージ うちのマサオが石投げてるよ」

「コーラー瓶にガソリンつめて、あれえ、見てみいー」

「わったー火ぬ神が怒っているさあー」

燃えているのはYナンバー^{*7}だ。

フォードもクライスラーもMPカーも

ひっくりかえって燃え上る、Y、Y、Y、Y、

ドンめかち バンめかち ボンボンめかち

「りかりかりか わったーも行かんとらんサ」

「マツチ持つて、なあ、りか！」

「待て待て 金属バットとガスボンベ持って走ってくるサ」
 叛乱だあ 暴動だあ 革命だあ

指笛吹いてピーピーピー

舞うれよ舞うれ、カチャーシー

この世をみんなで掻き回し、カチャーして変えるのさ

舞うれ 舞うらな 舞うれ舞うれのスリサッサッ！

私は熱風に舞い上がる紙切れをつかみ

火のついたマッチ棒でかきなぐる

—この狂気はいつたいたいなんなのか

知花弾薬庫に隠された毒ガスのせいか

それともこの島の土に埋められ

永久化されようとする核物質のせいなのか

朝に夕に轟音を発し

ベトナムへ向かう爆撃機のせいか

憎悪は赤々と照らしだされ

つぎつぎに炎上する重ねられた病根

燃えているのは黄ナンバーの外車ではない
 あれは沖縄の裸の心だ^{*}

そう書きつけたのは四十年以上も前のこと。

いつときの繁栄と背徳とを引き換えに

殷賑をきわめたコザというマチは、

あの夜、一気に燃えあがり、一夜にして燃え尽きた。

絢爛豪華なあの光景をガラス絵のように切り取って

それぞれの胸底に深く秘め

息を殺して生きている。

✓ 沖縄市と呼び名を変えたコザのマチ。

空港通りも中央商店街もひっそりかんとして

かつての私が落ち込んだ巨大迷路は、そっくりそのまま、

このマチそのものとなり、いよいよ深まる闇の中にうずくまる。

✓ いつまでも修復されることのないあの夏の映像。

心のほころびをそのままに

それでも寝苦しい夜を目覚めているしかない私たち。

いまでも引きつった頬のまま、涸れた涙を見つめているあの人たち。



この街を 黙って通り過ぎることができない。

青春の足跡が尖ったガラス片のように散らばっている。

思わず路上に座り込み、ガラスの面に映し出される、もう一人の自分の顔をのぞく。砕けたガラスに映っているのは遠い昔の空か、今日の空か。

時間は止まったまま動かない。

今日の空はあの日と同じ底なしの色。

あつ 道の向こうから、こつちをじっと見ている人、

あれは誰？

あれは……、あれは……あの日と同じ青い服を着た私ではないか。

ああ、なんと、四十年前の私が、

いまでもあの路上に立ち尽くしているとは……。 (END)

*1・*2・*3 自著『闇の相聞歌』・「幻の螢」より。

*4 コザは現在の沖縄市。戦後の米軍政下で基地の町として繁栄した。

*5 知名定男「バイバイ沖縄」。

*6 琉歌、航海の安全を祈願する。

*7 米軍関係者の車両ナンバーはイエロー、Yナンバーとも。

*8 コザ暴動 1970年12月20日、MPの交通事故処理に騒いだコザの住民に対し、MP隊が威嚇発砲したため怒った人々が米人車両に次々に放火、負傷者、逮捕者が相次いだ事件。

*9 自著『潮風の吹く街で』・「コザ暴動」より。

両目をつぶる。

夜光虫 海螢 ホタルイカ

わたしの深海に棲む古代魚、人魚、シーラカンス。
加速する水圧につぶされ、凹んでしまった眼球を
カメラのように露出して
ときおり異様な光を放つ わたしの発光器よ

訣別のしるしに

きまつて五月に降る雨。激しい雨。
丸三日間を昏迷の闇に閉じ込めて、
昼となく夜となく、地もなく空もなく
いつせいに注ぎこむ雨の激しさ。
警戒水位をとうに越え、床もベッドも水浸し、
身体の底がすつぽり抜けた。

どつと洗い流された二日酔いの吐瀉物
机上に積もる思案の山も電柱のアジビラも
苦心惨憺のなごりはすべて渦に飲み込まれ、
散り散りこなごな、逆巻く濁流にのみ込まれた。
それでもわずかな希望は一コ、二コ、
ぼつくり浮かび上がってきただろうか。

1972年5月15日、「祖国復帰」
祖国という言葉、その意味合いを
思い思いに手探りまさぐり夢想して
リュウキュウは再び沖縄県に復古した。
町という町、島という島は大荒れに荒れる。
ツブテとなつて放たれる集中豪雨、イカズチ稲妻、氾濫の街。
ずぶ濡れの行進がシユプレヒコールをくり返し叫んでも
ひとことも聴こえない。

聾哑者の不安な面持ちで、
ただ見ている ただ見ている ずぶ濡れの足どり。

雨戸の隙間からこっそり覗いている　ずぶ濡れの足どり。

あの日付を忘れない。

西暦1972年のページを引き剥がして、

この日、柱の日めくりは昭和の年号となる。

またも母国となった日本では天皇が替わる度に年号も変わるので、
計算機片手に加減算をやりくりしてみても、

なぜか、いつもご破算で終わる。

ハイ、ゴハザンデネガイマシテエーハ……ゴハザンデエ……

エー、クヌ計算機ヨオ、使イ物ニナランドー

その夜、篠つく雨に叩かれながら

『首里城明渡し』の芝居を観に行った。

「琉球処分」の史劇を〈日本復帰特別記念興行〉と銘打って、

「5・15処分」の催しとするとはネ。シタイヒャー！

冲映本館の劇場内はしんと静まり、無念の涙がぼうぼうのごうごう。
みるまに真っ赤な鉄砲水となつてガープ川を押し流す。

――溺死者無数。救助なし。



洪水のような雨がとつぜん止み

街に降り注ぐ白々しい光

人々はみな顔をつけかえて

物珍しげに街に出かける。

それぞれの思案を胸のうちに押し込めて

引きつりがちな笑みを浮かべては

賑わう街を日がな一日、あてどもなく往復する。

なにもかも虚しい季節だ。

五月、途方にくれる木の芽時

発熱の、この胸苦しさをどうしよう。

伸び盛りの木の幹は自らの内部を充たしきれずに

内部に洞を広げ、虚はさらに洞を侵蝕し

なおも膨れ上がる虚。

糸がは全った「沖繩」とは「ニサ」のことなのだ。言うならば 匹C
数年前、コザという町で目の当たりにした光景こそが、私がどつぶり体
感したオキナワということになる。当時、沖繩はアメリカ世の真つ只中
にあり、軍事的にも文化的にもコザはその中心となっていたのだから。
その光景のあれこれも、その風俗や流行も、今では歴史の一断面となっ
てしまったが、あのとき受けた衝撃はなお私の深部にウィルスのごと
く潜んでいる。なにか事ある毎に、書きとめておいた古いメモを改めて
読みなおし、その断片をつなぎ合わせて「コザという街があった」とい
う物語風の詩としてまとめてみた。

コザ市はカデナコークタイの門前町として栄えたマチだ。日本復帰
後、イメージチェンジをはかつて沖繩市と改称されたが、ベトナム戦が
激化する頃の五年余をコザで過ごした私は「沖繩市」とはドコなのか、
とつさには理解できず、返事も上の空。いつも、ついコザと言ってしまう。
コザは私の原点なのだ。

この「コザという街があった」は初め、自分らの同人誌『あすら』に
掲載を始めた。ところが東京で発行されている詩誌『青焰』の編集人だ
ある島木綿子さんという知人が、この出だしの部分を読んで、電話をか
けてきた。「これはブルースだわね」、いきなり彼女はそう言った。以前、
コザに住んでいたという。聞くと、私が暮らした時期と重なっている。
しかもご主人はジャズマンで、現在も演奏活動をつづけているバンドマ

スターなのだそうだ。島さんは島袋さんだったのだ。

「これ、『青焰』に載せてくれない？」と言われ、次回からの掲載に同
意した。彼女の要望のせいもあるが、現在もさ迷いつづけている私の
「ラビリンズ」を向こう側の人にも知って欲しいと思う気持ちもあった。
連載は2006年から2011年までの約5年、去年の「夏号」で終了し
た。今年の「夏号」の原稿募集というときになって、木綿子さんは長年患っ
ていた肺癌が脳に転移し、この三月、ついに帰らぬ人となってしまった。
始めの頃、「これが本になるとときには、私にもなにか書かせてよね」と念
を押されたことがいまさらのように思い出される。歲月人を待たず、で
ある。この詩集を出すことで、幾ばくかの気持ちを伝えられたらと心か
ら願う。

なお、「2」の「プライベート・レッスン」は（コザ・その後）のつも
りで書いた。「1」を『青焰』に、「2」を『あすら』に掲載したものを部
分的に削除したり、新たにフレーズを挿入したりして、なんとか一冊の
詩集にまとめることができた。納得のいかない部分も多く、躊躇う気持
ちもあるが、今年は日本に復帰して四十年、出すなら、この5月15日と
したい。「沖繩」にまつわるさまざまな事象が私を触発し、言葉を吐き出
すことを唆せていると思う。

最後にこの詩集に、比嘉加津夫氏のイラスト、及び、石川文洋氏の貴
重な写真を使用させていただいたことに心より感謝申し上げます。

佐々木 薫

東京に出生。1964年沖縄に移住。

既刊詩集	潮風の吹く街で	1988年
	闇の相聞歌	1990年
	汽水城	1996年
	蝶なて戻ら	2007年
	那覇・浮き島	2010年

季刊詩誌「あすら」同人

佐々木薫詩集 ディープ・サマー

2012年5月15日 発行

著 者 佐々木 薫

発 行 あすら舎

〒900-0005 那覇市天久1090-1・B301 Tel・fax 098(867)6729

表紙画・イラスト/比嘉加津夫 写真提供/石川文洋 装丁/嘉数裕子

印 刷 でいご印刷

定 価 1200円(税別)